

孤独担当大臣

二年にわたりつづいたコロナ禍がようやく収束しそうだ。音もなくやってきて人々を不安と恐怖の渦に巻き込み、そうして再び音もなく立ち去ろうとしている。この魔物のような感染症が私どもの社会に何を残したのか。徹底的に検証してほしい。

満潮時に隠れていた岩礁が干潮時になるや露わになる。その瞬間に居合わせて息を飲んだことがある。伊豆半島のとある海岸での経験である。平時にあつては特に問題とはならなかったものの、コロナ禍という有事にいたりにわかには露呈し、その深刻さに驚かされた問題がいくつもある。

二〇一八年の一月に、英国のメイ首相(当時)は世界で初めて「孤独担当大臣」(Minister for Loneliness)を設けたという。気がつけば日本でも二〇二一年の二月に英国に次いで「孤独・孤立対策担当大臣」が任命され、内閣府内に担当部局が設置された。このことは、とかく私的な問題として捉えられがちな人々の孤独や孤立が、コロナ禍にいたり政府の公的な支援を要する深刻な問題として浮上したという

渡辺利夫

(公益財団法人オイスカ会長)

一九三九年、山梨県生まれ。七〇年、慶應義塾大学大学院経済学研究科博士課程修了。経済学博士。筑波大学・東京工業大学教授、拓殖大学学長、総長、学事顧問などを歴任(二〇二〇年十二月、退任)。二〇一七年六月より現職。

事実を物語る。長期にわたりロックダウン(都市封鎖)を余儀なくされた英国はもとより、自粛要請という緩やかなものであったにもかかわらず、人々の他者との接触・交流を妨げ、そうして深刻の度を増した孤独・孤立が高齢者や非正規労働者や一人親世帯などの人々を苛み、これが彼らの心身にいたたまれなくなるような負の影響を及ぼしたのであろう。

私どもはとかく「個」とか「個人」として生きることをよしとする観念を弄ぶ癖がある。しかし、危機に臨んでは他者との関係性を確認せずして生きていくことは難しい。孤独をよしとし孤立して生きるものが何か潔いことであるかのような物言いは、穏やかな平時での軽口であらう。

ハロウィーンで渋谷のセンター街に集う奇妙な出で立ちの若者の騒ぎを「上から目線」で批判的に報じるテレビ番組にいくつか出合った。コロナ禍から解放されれば、少なくとも若者が他者との何らかの関係性を求めてそのように立ち振る舞うのは当然のことではないのか。